第42号

くすり博物館だより

1999（平成11）年10月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY
内藤記念くすり博物館　〒501-6195　岐阜県羽島郡川島町竹早町1
Tel：058689-2101 Fax：058689-2197 http://www.eisai.co.jp/museum/

企画展
薬の神様・神農さんの贈り物
～本草の世界を見つめる～

「神農さん」と呼ばれ、古来より親しまれてきた薬の神様の伝説と、今日までの本草学の歴史を紹介した企画展は、おかげさまで大変好評です。この企画展は大阪・道修町の少彦名神社で行われる神農祭にちなんで、11月23日まで開催しています。

今回の『くすり博物館だより』では、企画展で展示している本草学の書籍をいくつかご紹介します。

本草学とは、身近な植物·鉱物·動物など自然物の形態や生態、薬として用いるときの調製法・製剤法・処方・薬効・薬理などを研究する古い時代の薬物学です。日本では、6～8世紀に中国から伝わった本草書『本草経集注』『新修本草』によって本草学の基礎が確立し、漢方医学と結びついて発展してきました。江戸時代になると、明の李時珍による『本草綱目』が伝来し、その影響を受けて日本の本草学者による、わが国独自の本草書が著されるようになりました。さらに江戸後期に蘭方医学が伝わると、近代的な博物学や植物学的な観点に基いたものへと次第に移り変っていきました。それぞれの時代の本草学者たちが研さんを重ねた名著をぜひごらんください。

▶ **企画展会場；**
「発達した本草学」のコーナー

◀ **企画展会場；**
「神農伝説」のコーナー

伝統的な本草学

本草学は、自然物を薬として利用してきた経験の中から生まれた実用的な学問です。その知識は本草書という形で積み重ねられ、後世へと引き継がれてきました。中国の『神農本草経』など伝統的な本草書では、薬効の強弱によって薬物が分類されていますが、16世紀に刊行された『本草綱目』以降、動植鉱物など自然物の種類によって分類されるようになりました。さらに日本では、中国産と国内産の薬物を比較する研究も進められました。

日本最初の本草書

『本草和名』 深江（根）輔仁 著　延喜18年（918）頃成立

（写真は寛政８年（1796）に出版されたもの）

平安前期に著された日本最初の本草書です。当時の本草学は、中国から伝来した『神農本草経集注』や『新修本草』などを教科書としていました。そのため中国の本草書に記載されている薬物は、日本では何を指すのかといった同定作業が必要でした。この書物は『新修本草』に書かれている漢名（＝中国での名前）薬物を中心に、1025種の薬物に和名（＝日本での名前）をあて、国内に同じ産物があるかないか、その産地を記しています。平安時代前期の動植鉱物名を知る上で重要な書物です。

日本の本草学に大きな影響を与えた

『本草綱目』 李時珍 著　万暦24年（1596）初版刊行

（写真は万治２年（1656）に日本で出版されたもの）

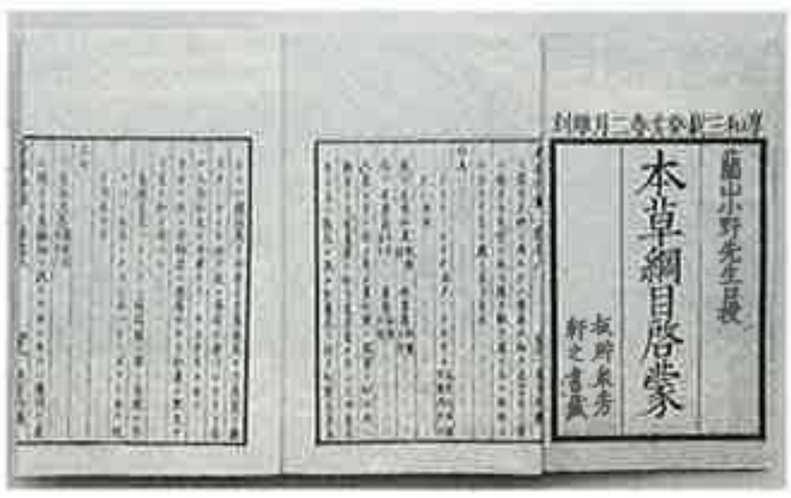
中国国内はもとより、日本の本草学に大きな影響を与えた書物です。『神農本草経』以来、薬効という点から上･中･下の三品に分ける分類方法が採用されていましたが、この本以降は自然物の種類、例えば鉱物や動物といった分類で分けられるようになりました。

『本草綱目』中のさし絵▶

国産の動植物に注目した

『大和本草』 貝原益軒 著　宝永６年～正徳５年（1709～1715）刊行

『本草綱目』と比較して、日本の動物･植物･鉱物をとりあげ、日本名と中国名･来歴･形状･効用などを詳しく述べたもので、「諸図」の巻には300点余りの図が掲載されています。著者の貝原益軒は、『養生訓』の著者としても有名な儒学者で、80年をこえる人生の中で得た経験を書物に著しています。



伝統を重んじた

『本草綱目啓蒙』 小野蘭山 著　享和３年（1803）刊行

分類配列は『本草綱目』に従い、それぞれの産物の名称･異名･産地･形態･利用法について詳しく述べられています。よく貝原益軒の『大和本草』と比較されますが、『本草綱目啓蒙』の方が伝統的な本草学にしたがっているといわれています。小野蘭山は71歳まで京都で本草学を講じ、江戸に下ってからは、幕府の医学館教授となり、本草学の発展に貢献しました。

西欧の植物学を導入した新しい本草学

江戸時代中期を過ぎると、医学や薬学などの各科学分野で、西洋の文化や技術などを盛んに学び、取り入れようとする風潮が高まりました。これまで中国大陸から学んできた日本の本草学界でも西欧の植物学を取り入れた新たな流れが誕生しました。

『泰西本草名疏』 伊藤圭介 著　文政12年(1829)刊行

リンネの分類学を日本で最初に紹介した本草学です。著者の伊藤圭介は、シーボルトから与えられた『日本植物誌』の植物の学名に、和名と漢名をあてはめる作業を行いました。日本産植物の学名と和名とを対応させて二四綱分類、雌雄蕊（しゆうずい）分類法と種や属の概念を紹介しています。

『植学啓原』 宇田川榕庵 著　天保5年(1834)刊行

西欧植物学を体系的に紹介した最初の書物です。根・茎・葉などの栄養器官の形態・植物生理・発酵・腐敗・物質循環などについて具体的な解説がなされています。著者の宇田川榕庵は西洋科学を取り入れた内科書・薬物書・化学書を多く著し、日本医学の近代化にも貢献しました。

薬草園から　『神農本草経』の中・下薬の植物

『神農本草経』は編者も編纂された時期も明らかではありませんが、中国最古の本草書として現代まで伝えられてきました。前回は記載されている365種類の生薬から、不老長寿のための養生薬である上薬の植物５種類を紹介しました。上薬のほかには、中薬・下薬があり、中薬は健康保持の薬、下薬は治療薬とされます。このため中・下薬は、長期連用をしない方がよいとされています。なお、中薬の１／３は動物性生薬であり、植物性生薬は２／３の80種類です。この中には現在どんな植物か判明していないものもあります。

今回は生薬としてよく使われ、また当園でも栽培している中薬・下薬の植物を紹介します。

中　薬

▼乾薑（かんきょう）

香辛料として身近なショウガのことで、生姜（しょうきょう）とも言います。胃液を分泌させて消化を助け、体内の水分の代謝をよくし、腸内のガスを追い出す作用があります。また肝臓の働きを盛んにするほか、鎮咳・去痰作用もあります。

▼葛根（かっこん）

葛粉をとるクズの根です。ただし生薬の葛根は、冬に堀り上げた太い根の外皮をとりのぞいてサイコロ状に切り、天日で乾燥させたものです。発汗・解熱作用に優れ、葛根湯（かっこんとう）などの漢方薬に配合されます。民間でも葛粉を湯でといた葛湯をかぜの初期に用います。

▼当帰（とうき）

この生薬の元の植物は中国産のトウキですが、日本では大和トウキの根をさします。漢方では婦人薬の主薬で、鎮静・鎮痛・強壮剤として妊婦のむくみや月経痛などの薬に配合されます。また、手足を温める作用があり、冷え性・血行障害・貧血などにも用いられます。

▼麻黄（まおう）

シナマオウの茎を日陰で乾燥させたものが、生薬の麻黄です。主成分であるエフェドリンは、塩酸エフェドリンとして、ぜんそくの鎮咳薬や百日咳に用いられます。

▼芍薬（しゃくやく）

花の美しいシャクヤクの根の外皮をとりのぞいて乾燥させたものです。漢方の要薬であり、婦人薬として利用度の高いものです。筋肉のけいれんから来るひきつりなどを和らげる作用があり、腹痛・下痢などに用います。

下　薬

下薬の植物は、キンポウゲ科・テンナンショウ科・タデ科・ナス科・トウダイグサ科など毒草の多い科に属するものが多いのですが、ここでは毒草の部類に属さないものを紹介します。

▼桔梗（キキョウ）

キキョウの根を乾燥させた桔梗根は、咳・痰・喉の痛みに用いられます。民間薬として用いるときは、桔梗根のみを煎じたものは苦くて飲みにくいので、同量の甘草を加えます。ただし、体の衰弱が激しい人は桔梗根の連用を避けなければいけません。

▼夏枯草（カゴソウ）

ウツボグサの花穂のことで、利尿・消炎剤として、腎臓炎・膀胱炎などに用いられます。夏枯草のみを長期連用すると、胃を刺激するため、胃弱の人は注意が必要です。

▼梓白皮（しはくひ）

キササゲの樹皮で、解熱・利尿作用があり、腎臓炎浮腫や腎炎・ネフローゼの際に用いられます。

▲中薬の植物：クズ（葛根）

▲下薬の植物：ウツボグサ（夏枯草）

薬用植物園 主任　白井英夫

くすり博物館　フォトコンテスト

最優秀賞 受賞おめでとうございます

くすり博物館でフォトコンテストを始めたところ、冬の部・春の部にはたくさんの方からご応募がありました。ありがとうございました。どの写真も、くすり博物館と薬草園の新しい魅力を引き出しており、審査が難しいほどです。この『くすり博物館だより』が出る頃には夏の部の募集が終わり、秋の部の募集が始まっています。皆様もぜひご応募ください。

なお、入賞作品を展示館2階で展示しております。夏の部の展示は、10月15日から11月14日までを予定しています。ぜひごらんいただき、くすり博物館の四季をお楽しみください。

冬の部
「冬彩彩」
中井弘男様

春の部
「満開の桜」
小野木基様

応募要項はくすり博物館でお渡しするほか、エーザイのホームページでもごらんいただけます。
http://www.eisai.co.jp./museum/

四季の薬草をアルバムで紹介しています

ご来館いただいた方に、その季節以外にどんな薬草があるかをご紹介するためのアルバムを本館1階のロビーに置いています。これはエーザイ川島工園勤務の笠井正義様が仕事の休み時間を利用してデジタルカメラで撮影された力作です。撮影日時もわかりますので、次回ご来館されるときに大変役に立ちます。ぜひご活用ください。

TOPICS

■企画展図録が好評です

この図録は、東洋医学のルーツである神農さんと、現在の博物学のルーツである本草学に親しみたい方におすすめします。定価900円。（購入ご希望の方はハガキかFAX.でお申し込みください。送料はご負担いただきます。代金は到着後払い）

■90万人目をお迎えしました！

7月6日に揖斐川年金友の会でご来館された揖斐郡池田町の樋口静一様が、めでたく90万人目の来館者となりました。樋口様と前後賞の方へ館長より記念品が贈られました。100万人達成は21世紀になるでしょう。

◀右より二人目が樋口様で、その左のお二人が前後賞を受賞されました。右は当博物館館長の三宅康夫

■夏休み親子教室は大人気！

2日間で親子40組のところ、その数倍の応募はがきが殺到し、急きょ定員を増やして80組の親子に参加していただきました。生のハーブを中心としたリースは、どれも型にとらわれない個性的な作品となりました。レモンと丁子（ちょうじ＝クローブ）を使ったいい香りのポマンダーも大好評でした。なお、薬草友の会ふれあいグループの皆さんがリースの土台作りやハーブの刈り取り、当日のリース制作のお手伝いをしてくださいました。

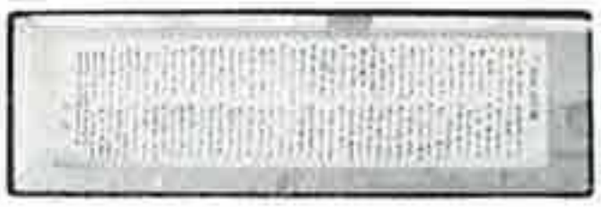
■2000年春の企画展をくりあげて開催

日本薬学会120年会が、2000年3月末に岐阜で開催されます。このため当博物館の2000年度企画展をくりあげて3月末より実施いたします。

＜新収蔵資料のご紹介＞

◆奈良県の桜井謙介様より『医療便覧』巻4と『全九集』巻之3のご寄贈がありました。桜井様は以前図書室を利用された折、当館収蔵の同書に欠本があることに気づき、所有されていた2冊をご提供くださいました。

◆大阪府の山口朗子様よりお父様の使われていた顕微鏡など6点をご寄贈いただきました。「結核征伐の歌」（＝写真）「消化の難易」の額など珍しいものも含まれています。



資料・図書寄贈者ご芳名

Iwana Arabas　五十嵐彰
井上栄　岩治勇一　大瀧武雄
大貫茂　奥富薬局　片桐平智
金武美江子　小林鈔次　桜井謙介
新庄勝助　鈴木郁生　須田寛
中村陽一　バイエル薬品(株)
端野博康　福本武司　堀岡正義
松木明知　真柳誠　宮崎惇
山口朗子（敬称略）
～ありがとうございました～

館　長　三宅康夫　**学芸員**　稲垣裕美(編集担当)　**学芸員・司書**　野尻佳与子　伊藤恭子　**庶務**　森田麻起子　小島敦子(見学受付)
市橋由志子　**薬用植物園 主任・学芸員**　白井英夫　**栽培管理**　栗木省三　苅谷辰行　**顧問**　青木允夫　ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ　逸見誠三郎
内藤記念くすり博物館　開館／9:00～16:00　休館／月曜日・年末年始(12/28～1/8)